

漢字こそ日本語の基礎

山田：先生と私は年齢がそう変わらないので、われわれの中学時代（旧制）のことはおわかりと思いますが、私たちのときは中学一年から漢文をずっとやりましたね。私は開成中学だったんですけど、たいへん英語の先生もよかった。漢文を教える国語の先生にも立派な人がおられました。漢文をやっておりますと漢字を覚えますが、その点で今先生がおっしゃった“偽”ということなんか、漢字の時間によく習ったものですよ。どうなんですか今、漢文はぜんぜんいらぬということになっているけれど、どうなんですかねえ、漢文というのは……。

石井：私は、日本語というものは漢字を用いて表わさなかったなら、絶対に日本語の持っている本質はわからない。漢字は日本語を表わす最高の文字だと思いますね。例えばハナというような言葉でも、ハナというのは、元来突出したところをハナというわけです。ですから、漢字で書けば“端”という字が一番合っていると思います。ところが顔の中で一番突出した部分は鼻ですね、ですからこのハナという言葉は、今は漢字で鼻という字を使っていますけ

れど、大和言葉で言えば、元来は端という意味の言葉なんです。それから咲く花も、あれはみんな端に咲いているわけです。中間に咲くような花はないのでして、みんな端っこに、つまり端に咲いているものなんです。ですから、今では「花」という字をあてていますけれども、花という言葉の場合でも、大和言葉の突端という意味で使ったのだと思うのです。

ところが、いまや花の場合は花という漢字で書き表わします。それから、顔のハナは鼻と書きます。しかも鼻から出てくる液体は洩と書きます。“^{サンスイ} 洩”に“^{エビス} 夷”という字を書くあの洩という字です。このように、漢字というものは日本語とまったく違った言葉、中国語を表わすために作られたものですが、それをそのまま借りてきて、日本語の漠然としているハナという言葉、このハナの場合は端という字、この場合は鼻という字、桜のハナは花で、鼻から出てくるハナは洩という字を使って表わす。

山田：ハナという一つの概念が、漢字ではっきり意味づけされるわけですね。

石井：このように区別することによって、それまで漠然としていた言葉というものが、非常にはっきりしたものになり、整理されました。

だから漢字の多い文章は、一目見ただけで何を言おうとしてるかが実によくわかります。これは大和言葉でさえもそうなんですから、ましてや校舎、講堂というような言葉(漢語)になりますと、同じ「こう」という言葉が、校舎の校は学校の校です。講堂の講はレクチャーの意味の講。講義の講です。同じ「こう」でもまったく内容が違うわけです。ところが今の教育では、「こう」と発音を表わすかなでしか教えない。

ですから言葉に対する繊細な感覚というものが発達しません。校舎のこうと、講堂のこうとが違った内容を持っているということを理解させるには、漢字で教える以外にはないのです。

これは実は戦後に始まったことでなくて、こういう教育は明治以来、百年の長きにわたって行なわれているものなんです。教育のこの墮落、退廃というものは、戦後起こったものではない、すでに明治の義務教育が割られた時に始まった、というのが私の考えなんです。

私が今書いているものがあるんですが、教育というものは、義務教育などという言葉が起こった時、すでに教育の退廃があったというように書いているんです。教育というものは、義務とか権

利とかというものではなくて、もっと人間としての本能的な、人の子の親として、自分の経験を次の世代に、自分の跡継ぎに伝えたいという、その愛情から発する本能的なものなのだ。そのようなものに対して、そういう教育にたいして、義務教育などという名前をつけることに、すでに教育を誤らしめる原因があった。と、そのように考えています。

山田：教育に対する心構えが、スタートから間違っていたということですね。

石井：それから映画の中にもありますが、親たちが、「学校におまかせすれば、それでいいじゃないか」と言っていますが、こういう考え方が一般にありますね。しかし、そんなものではなくて、できようができませんが、自分の経験から獲得したものをどこまでも子供に伝えようというのが教育だと思うんです。ですから私は、義務教育なんていう言葉が作られた明治の初めに、もう教育の墮落が始まったと考えているのです。それに輪をかけたのが、敗戦という未曾有のできごとです。けれども、これは拍車を加えただけであって、すでに教育というものに対する考え方の間違いは明治から始まっている、そう考えております。